

◆奨励賞◆

おじいちゃん、ありがとう。

真土 小学校 五年

山根 亜睦

八月九日午前六時ごろ、わたしのおじいちゃんが亡くなりました。わたしはなみだをぼろぼろとながしながら、おじいちゃんの手をにぎりました。心の中でおじいちゃんに、「最後までよくがんばったね。かっこいいよ。おじいちゃんからもらった命、大切にするね。おじいちゃんがいなかったらわたし、いなかったんだよ。ほんとうにありがとう。大好き。」そう伝えました。

次の日の夜、お通夜をしました。おじいちゃんの大きな写真のとなりに、きれいなお花がたくさんならんでいました。その写真のまえで、おじいちゃんはひつぎの中でねむっていました。お通夜を終えた日の夜、わたしは、お母さんといろんな話をしました。「亡くなるってなんなの。亡くなるってこんなにつらいんだ。」と、いろんな思いで、なみだがとまりませんでした。その夜は、おじいちゃんのねむるとなりの部屋で、ねました。

次の日は、おそう式でした。ひつぎの中のおじいちゃんのまわりに、お花や、おじいちゃんがすっていたタバコ、このまえ、わたしがおじいちゃんに作ったお守りなど、たくさんおいてあげました。そして、火そう場に行きました。おこつなんて見たことなく、ドキドキドキして、お母さんにしがみつきました。お母さんが、「おじいちゃんだからこわくないよ。」と言っていたので、「そうだ。おじいちゃんだからこわくない。」そう思っ

て、「うん。」と言いました。だけど、それでも、やつぱりドキドキしてしまい、ちよつとこわかったです。「人をやくなんてしんじられないよ。おじいちゃん…。さっきまで…。どうしておこつだけに…。」こんなことを思っていました。「まさか、今まで亡くなるなんて、思ってた…。」

「今九十四才のひいおばあちゃんもいつかそうなってしまうかもしれない。」そう思って、ひいおばあちゃんをはじめとおふろにさそいました。ひいおばあちゃんのせなかをあらってあげると、とてもうれしそうに笑うのを見て、わたしはともうれしかったです。

おじいちゃんが亡くなって、もう会えなくなってしまうました。だから今会える人がいること、大好きな人といっしょにいられること、それはとても幸せなことだと感じました。「おじいちゃん、ありがとう。」